

オフィス アンケート調査 コンジョイント分析
 仕事環境 環境評価

AJ15058 宗 東楽
 指導教員 志村 秀明
 担当教員 栗島 英明



1. 研究の背景と目的

近年、ワークライフバランスの見直しやテレワークの導入など、人々の働き方が変化している。その変化は、「働く場所」にも起きており、例えば、自由に席を選んで仕事ができるフリーアドレス型オフィスや、カフェのような空間を取り入れたオフィスなど、コミュニケーションを促したり、自由に過ごせるオフィス空間づくりがなされるようになってきている。

オフィス空間は、ほとんどの働き世代にとって1日の大半を過ごす重要な場であり、人々が仕事をする際に何を基準に場所を選定しているか、どういった環境であれば仕事をしやすいかなどのニーズを把握し、より自由に、快適に仕事ができるオフィス空間を考える必要がある。

仕事環境やその空間的要素に関する既往の研究としては、モバイルワークにおける作業環境について外部環境と内部環境とを学生が比較・評価したもの¹⁾、店舗において読み書きや会話などの各行動をとるにあたってどのような座席が好まれるのかを調査したもの²⁾オフィス利用者自らがデスク周りの空調や照明を調節する技術について記述したもの³⁾、などがある。しかし、利用者による現状の仕事環境の評価や、彼らが求める理想のオフィス空間を導き出し設計に活かす手法についての調査はあまり見られない。

以上より本研究では、オフィスの利用者による自身の仕事環境に対する評価とともに、仕事環境を評価する上で重視する環境特性を把握することを目的とする。

2. 研究方法

本研究の研究方法を以下に示す。

まず、社会人を対象にこれまでに仕事をする場所として利用したことがある環境について聞き取り調査を行い、利用者が特に重視しているが、評価の分かれる仕事環境の要素を抽出する。

次に、抽出した仕事環境の要素についての評価と選好を把握するためのアンケート調査票を作成する。本研究では、抽出した要素を組み合わせ、好ましい仕事環境について尋ねる選択型コンジョイント分析⁴⁾を実施する。

コンジョイント分析は、主にマーケティング分野で利用される分析手法であり、特定の対象が持つ要素について重視している点、また最も好まれる要素の組み合わせを統計的に探索する方法である。

聞き取り調査やアンケート調査の結果を分析し、年齢・性別・職種などの違いによって、好まれる仕事環境がどう変化するかを把握する。その結果を踏まえ、利用者に望まれるオフィス空間について考察する。

3. 調査結果・考察

(1) 重視される仕事環境の要素の抽出

重視される仕事環境の要素を抽出するための聞き取り調査は、2018年8～9月に社会人18人(男性14人、女性4人)を対象に実施した。調査では、回答者の多くが重視していた仕事環境の要素の中でも、多くが好ましいと考えるものではなく、人によって評価が分かれるものを抽出した。これは、アンケート調査において、回答者のニーズの多様性を把握するためである。

調査の結果、表1に示す要素が抽出された。仕事環境において重視され、かつ評価の別れた要素は、「席の選択」、「周囲との距離感(デスク周りの仕切りの高さ)」、「室の明るさ」、「気分転換やリラックスする場所」、他部署や他社との交流といった「他者との関わり」であった。

表1 特に重視された仕事環境の要素

仕事する場の評価において重視する要素(属性)	各要素の説明
席の選択	「フリー」：フリーアドレス型 「固定」：固定座
周囲との距離感 (デスク周りの仕切り)	「低」：パーテーション等の仕切りが無く、周囲の行動がよく見える 「やや低め」：仕切りは一応あるが、座っている状態でも周囲の人とすぐ目が合う程度の高さ 「やや高め」：仕切りがある程度高く、座っている状態では周囲の人と目が合いにくい 「高」：各席が高い仕切りで区切られ、プライベートな空間が形成されている
明るさ	「明」：とても明るい 「やや明るめ」：どちらかというと明るい 「やや暗め」：どちらかというと暗い 「暗」：とても暗い
気分転換、 リラックスする場	「社内」 「社外」
他者との関わり	「必要」異職種・他部署同士の交流を促す取り組みがあるとい 「不要」上記のような取り組みは必要ない

(2) アンケート調査票と調査概要

以上の結果をもとにアンケート調査票を作成した。設問は、現状のオフィス環境とそれに対する評価、望ましいオフィス環境について問う選択型コンジョイント分析である。調査は、2018年12月に調査会社モニター500名に対して、webで実施した。

(3) コンジョイント分析の結果と考察

コンジョイント分析によって得られた各要素の重要度を図1に、各要素の選択肢の効用値を図2に示す。

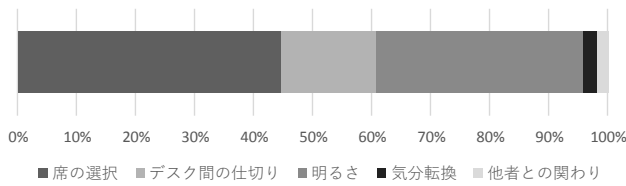


図1 各要素の重要度 (全回答者)

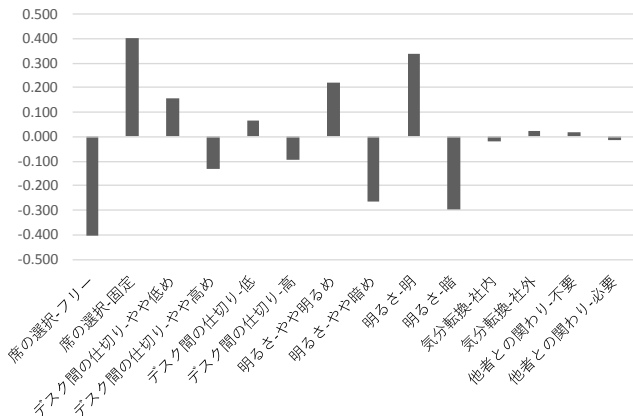


図2 各要素の選択肢の効用値 (全回答者)

各要素の重要度は、「席の選択」、「明るさ」、「デスク間の仕切り」、「気分転換」、「他者との関わり」の順となった。また、効用値を見ると、「席の選択」はフリーアドレスより固定席が、「デスク間の仕切り」は低い方が、「明るさ」は明るい方が好まれる傾向となった。「気分転換」、「他者との関わり」は、差がほとんど見られなかった。以上が全体の傾向であるが、現状のオフィス環境、業務内容、性別、年代などによって、違いが生じた。スペースの関係上、「席の選択」と「明るさ」についてのみ、述べる。

①席の選択

現状が固定席やフリーアドレスと固定席の併用型の場合、フリーアドレスの効用値は負であり、現状がフリーアドレスの場合、効用値は正であった。現状が併用型の場合、現状が固定席の場合と比べてフリーアドレスの負の値は小さかった。つまり、フリーアドレスの経験の有無が選好に影響を及ぼしていると考えられる。また年代別では、年代が低いほど重要度が低く、若い年代ほど「席の選択」に対する重要度が高かった。フリーアドレスの効用値は、上の年代ほど負の値が大きくなった。先の結果を踏まえると、上の年代ほど固定席への馴染みが強いことが原因と考えられる。

男女別では、女性の方が「席の選択」に対する重要度が大きく、フリーアドレスの効用値の負の値が大きかっ

た。一般的に女性の方が内勤者が多く、自身の物を持ち込む傾向が強いことが原因となっている可能性がある。

業務内容別では、「ひたすら1人で打ち込む」業務の場合、フリーアドレスの効用値の負の値が大きく、「人とよく会って話す」業務の場合、「席の選択」はあまり重視していなかった。

②明るさ

現状のオフィスが暗い場合、明るい場合と比べて、「やや暗め」「暗」に対する効用値の負の値が大きく、現状に不満を感じている可能性がある。

年代別では、50代・60代は他の年代と比較して「暗」に対する負の値が大きかった。視力の衰えによって見えづらくなることも原因の1つと考えられる。

男女別では、「明」と「暗」の効用値について大きな差が無かったが、「やや明るめ」と「やや暗め」の差は女性の方が大きかった。女性の方が、微妙な明暗差までこだわる可能性が示唆された。

業務内容別では、「ひたすら1人で打ち込む」業務の場合、他の業務内容に比べて「暗」の効用値の負の値は小さかった。

4. 結論

本研究では、マーケティング手法である選択型コンジョイント分析を用いて、利用者の仕事環境に対する選好を分析した。このように建築を別の分野の手法を用いて多面的に捉えることで、利用者のニーズをより高いレベルで反映させた設計が可能になると考える。

今回の調査では、現状のオフィス環境や利用者の属性の違いによって、仕事環境の要素に対する選好が異なることが分かった。こうした分析を行うことで、利用者の構成・特徴に応じたオフィスづくりが可能になり、利用者が過ごしやすいオフィス計画につながるはずである。

一方、本研究では聞き取り調査で評価の分かれた5つの仕事環境の要素に焦点を当てて分析を行ったが、これら以外にもオフィスを構成するものは多く存在する。他の要素の抽出や評価についても今後検討する余地がある。

引用・参考文献

- 1) 野島耕平、渡邊朗子：公共空間におけるワークプレイスに関する基礎的研究：外部環境と内部環境におけるモバイルワークの比較実験、日本建築学会計画系論文集、70(587)、p. 57-64、2005
- 2) 丹羽由佳理、畠山雄豪、佐野友紀：座席選択傾向に基づく店舗内行為と空間要素の関連性、日本建築学会計画系論文集、82(731)、p. 41-48、2017
- 3) オフィスビルディング研究所、オフィスビル総合研究所：オフィスビル 2030—近未来 オフィスビルは必要か？、白揚社、2014
- 4) 栗山浩一：環境と観光の経済評価—国立公園の維持と管理、勁草書房、2005